

風景に地域とのつながりが…

小さな社会科研究会の巡検旅行で、越前・若狭(福井県)に行ってきました。直前の大雨で福井方面はさまざまに交通が寸断されたりしていましたが、米原から敦賀方面は問題がなく、三方五湖の近くにある年縞博物館(水月湖に湖底に積もった堆積物がほとんど攪乱されることなく1年に1層ずつの層をなし、それが7万年分45mきちんと堆積して掘り出された縞模様を展示している。1層1年で、その中に含まれる花粉などを分析すると、ある年の気候のようすなどがわかる?)、縄文博物館、気比神社、旧敦賀港駅鉄道資料館、北前船主の館・南越前町右近家(↑船絵馬)、そして、小浜の古刹・仏像を訪ねる旅をしてきました。

私が今回の旅で一番感じたことは、訪ねたところが、地域の景色と切り離された観光施設になっているなあ、という感覚でした。

若狭は30年ほど前に一度訪ねていますし、その後も日本海側の三国とか氷見、伏木、あるいは酒田、逆にもう少し行って温泉津、がんばれば金沢や富山でも、江戸時代からの風景の連続性というか、ちょっと情緒的に言うと歴史の積み重ねみたいなのを感じてきました。一方で、東北新幹線が通り、東北自動車道が走る郡山・福島やら仙台、少し行って会津若松では、そのころからその「連続性」というか「重み」は、感じられず、もうすでに景色は「(ミニ)東京だなあ」と思っていました。

ところが、今回、その「(ミニ)東京」的景色がほとんどすべてのところで感じられた。どんなに古いお寺も、歴史ある駅舎跡も、地元とは切り離された「観光施設」だなあ、という感じ。いくら北国街道・鯖街道、西回り航路(日本海沿岸・北海道の産物がここから山越えて京都・大阪に)、欧亚連絡(敦賀~ウラジオストク~シベリア鉄道が、ヨーロッパに行く一番早いルートだった)…(それに、谷戸田や用水路の風景を入れてもいい)がはぐくんできた歴史や文化、と言われても、それらと博物館や資料館、古寺仏像をつなげるのが難しい。博物館の説明も、お寺の説明も観光色に彩られているけれど、地元館が感じられない。やめてほしい「日本遺産」なんて。

高速道路、バイパス、道の駅…そして敦賀延伸で建設中の新幹線が、きっと、どとめをさすんじゃないでしょうか?敦賀で泊まったホテルから見た新幹線・敦賀駅の裏に広がる田んぼの風景も、もってあと5年だろうなあ、そんな感じを強く受けました。

